

ファインスチール



S U M M E R 2008

CONTENTS 通巻548

- 01 特集
亜鉛鉄板東部問屋組合のファインスチール普及活動
- 05 建築設計例
「深見の住宅」 高橋晶子+高橋寛/ワークステーション
- 09 板金工事に関する用語集 その5
- 11 建築めぐり
都市の地脈・水脈 松田浩子
- 13 日本金属サイディング工業会会員のご紹介
日新総合建材

No.3

社団法人

日本鉄鋼連盟



今号では、昨年6月にファインスチールWGを組織し、ファインスチールの普及活動に着手された亜鉛鉄板東部問屋組合 流通部会（部会長 野原 勝己 高木(株) 顧問）主要メンバーに、経緯、反響と評価、今後の進め方、ファインスチール普及会への要望などをインタビューしましたので、その概要をご紹介します（文責編者）。

1. 経緯

亜鉛鉄板東部問屋組合として、ファインスチール普及会の普及活動に協賛して、PR活動に積極的に取り組むとの気運が昨年来高まってきた。

そこで、昨年6月に流通部会の下部組織として、ファインスチールWGを発足させ、普及促進の方向性、方法などについて種々検討し、①根強く残る「トタン板」的イメージと拒否反応の払拭、②実需へ結びつくよう見積り、工期、工法など消費者からの問い合わせに対応出来るよう、流通、加工、施工の各業者との協力体制の構築に取り組むこととした。

先ず、金物店、板金業者の中にも「ファインスチールは、商品名ですか？」といった声はまだあるので、「ファインスチール」という名称を取引先の業界に浸透させることを目的に、昨年10月と、今年の2月に関東の「金物商業組合」並びに「板金工業組合」に対して、メンバー各社が県別に分担し、普及PR用ツール（ステッカー、のぼり、ポスター、パンフレット、ボールペンなど）を配付し、PR活動の緒とした。

2. 反響と評価

（反響の詳細については、3頁の「県別ファインスチール普及PR用ツールの反響」をご参照ください。）

- ・ 1回目の10月は、初回ということもあってインパクトがあり、興味を持ってもらえた感がある。
- ・ 2回目については、1回目との間隔がなかったためか反応は少なかったが、「ファインスチール」という名称については一定の認知が得られたと評価する。
- ・ 年2回の販促グッズ配付頻度は、十分な回数と思われる。
- ・ 但し、金物店に比べて板金業者は今一步の感がある。その背景としては、板金組合に加入している業者は工場建屋など非住宅系を主体としているため、戸建住宅の屋根材にはあまり興味を示さないこともあり、組合に対するPRは効果が薄いと思われる。
- ・ 今後は、2、3人多くて4、5人の職人を抱えて戸建を中心に仕事をしている親方向けのPR方法を考える必要がある。
- ・ のぼりについては、会員自社事務所は勿論、配付先の金物店及び板金店でもかなり掲げており、ポスター、チラシなどについても「ファインスチール」の意識付けに役立ったと思われる。
- ・ 但し、のぼり、ポスター、シールは、始めは掲げていたが、汚れたり破れたりして、邪魔になって、数ヵ月後には撤去した金物店も見受けられた。
- ・ また、ポスター、シールについては、もう少し人目を引くデザイン、色使いをとの要望や、製品の具体的な説明を明示して欲しい旨、があった。
- ・ 特に、テレビコマーシャルの影響が大きかったとの声が多く、CM放映後自社のチラシ500枚を配った金物店では、2件の注文が入るなど高率で、商売になったとの報告があった。



組合のファインスチール普及活動

■ステッカー、のぼり、ポスターの事例■



【参 考】

県別ファインスチール普及PR用ツールの反響

千葉県

- ・ポスターについては、テレビコマーシャル放映のタイミングも良く、店頭に貼り付けてある状態で、店先を通る人がチラッと見る風景もある（長塚京三氏に興味か）。
- ・シールは自社の車と、板金業者の車に貼るなど、PRに積極的になっている。但し、「ファインスチール」がまだまだ理解されていない所も感じられる。
- ・のぼりは、ガードレールなど店先に取り付けたが、のぼりを立てる場所に困った話もある。一方、テレビコマーシャルの反響もありゼネコンや工務店等から事務所入り口に設置した事で店全体のイメージアップになった、また、板金業界のイメージアップの声が聞かれる。

神奈川県

- ・テレビコマーシャルの影響で、建築関連の仕事に携わる人にも「ファインスチール」の言葉と金属屋根が軽いというイメージが広まりつつある。但し、一般消費者に浸透するには、もう少し時間がかかると思われる。
- ・シールの反応が良く、板金業者、工務店からの要望（もう少し欲しい）が強く、営業しやすい環境になったと感じる。
- ・テレビコマーシャルの影響か、施主から「屋根はファインスチールで」と工務店に依頼あり、もっとステッカーが欲しいという声が多かった。

茨城県

- ・板金業者及び金物店等の事務所に設置。また、ステッカーを貼る等、今迄に無い取組みで専門業者及び一般の方にも、ファインスチールという名前だけでも浸透するものと期待。
- ・板金業者によって取組みは様々であるが、ファインスチールを積極的にPRしようとする意識は全体として、まだ薄い。
- ・工務店の反応で「軽い金属屋根」や「金属屋根の雨音について」の相談があったとの声が聞かれた。

栃木県

- ・特に反響はありませんが、自社トラックにステッカーを貼り、事務所にポスターを貼って地道にファインスチールの普及に努める。
- ・板金工業組合の活動が活発でない為か、ファインスチールのPR等もまだ意識が薄い。

埼玉県

- ・テレビコマーシャルの影響もあり、金物店の反応が良かった。板金業者は、チラシに社名を押して、リフォーム営業に活用している
- ・金物店には、ポスターを貼ってあるが、一般消費者へのPRは、まだ不十分。

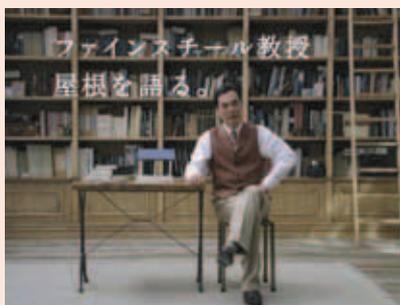
群馬県

- ・金物店等は、ステッカー、ポスター等貼り付けており、テレビコマーシャルの影響で話題になるが、一般の人の反響は、まだあまり感じられない。
- ・息の長い継続PRが必要と感じる。板金店の積極さも今ひとつの感がある。

東京都

- ・テレビコマーシャルとNHK大河ドラマ「篤姫」の父親役（長塚京三氏）の影響からファインスチールについても問合せがある。
- ・ポスターとステッカーは好評（長塚京三氏のポスターは、盗まれるケースあり）。
- ・金物店の反応は良い。但し、一般消費者には、ピンとこないのでは、との意見あり。一般消費者が見て分かりやすいチラシはないものか？
- ・シールの評判が良く、普及促進になる。
- ・テレビコマーシャルの影響で、認識は徐々に高まっていると感じる。鉄の優位性を、更に折り込んでほしい。
- ・販促物からの反応は余り感じられないが、今後更に宣伝する事で効果が上がると期待する。
- ・テレビコマーシャルが、それなりに認知されつつあり、継続実行を望む。

■ 放映されたテレビコマーシャル



1



2



3

「地震の揺れを考えると、家の重量バランスはとても大事。屋根は軽い方がいい。」



4



5



6

「安全、安心の屋根。」「屋根を考える人はいのちを考える人。」

3. 今後の進め方

- ・ 誰に、何を持って訴え、どの市場を狙うのか、さらに吟味して方向性、方法を再構築する。
- ・ 活動の成果がわかりにくく、評価も難しいが、普及PR用ツール配付といった地道な活動を継続する。
- ・ 一般消費者から、「ファインスチールはどこメーカーの製品ですか」との問合せもかなりあるので、カラー鋼板が進化（品質が向上）した金属屋根、金属サイディング用資材だと名前だけでなく、内容についてもPRする。ただ、各メーカーの見本帳やカタログには〇〇カラー鋼板と記載されている現状では、一般消費者に理解してもらうのに時間を要すると思われる。
- ・ 板金業界へのPR活動は、組合加盟店だけでなく、広範囲にPRしないと意味がないので、キメ細かな対応を行う。
- ・ 東京、神奈川、千葉では、かなり住宅のリフォーム需要が見込まれるので、リフォーム市場への普及促進策を重点的に展開する。

4. ファインスチール普及会への要望

- ・ ファインスチール普及会の活動内容が、全国に伝わるシステム作りをお願いしたい。
- ・ テレビコマーシャル、新聞・雑誌広告等により一般消費者に広告宣伝をお願いしたい。
- ・ 大手ハウスメーカーに金属屋根の使用を訴えて欲しい（コロニアルはハウスメーカーが使い始めたら、すぐに住宅全般に広まった例がある）。
- ・ 一般消費者に、よりダイレクトにPRできる展開をして欲しい。
- ・ テレビコマーシャルを具体的な分かりやすいものにして欲しい。例えば、長塚京三氏が金属屋根を葺いているところで、「この屋根は軽くて丈夫なファインスチールで造られています。」との台詞が入るとか。
- ・ また、現行のポスターは、A0判と大きいため貼れる場所が限定されるので、半分のA1判も造って欲しい。
- ・ 普及PR用ツールの継続をお願いしたい。併せて、ロゴ入りタオルとかカレンダー（金属屋根およびリフォーム前、後の写真で6枚綴り）などを追加して欲しい。

「深見の住宅」

設計 高橋晶子+高橋寛 / ワークステーション

「深見の家」は、2007年10月に神奈川県大和市に竣工した住宅である。

敷地状況

敷地は最寄り駅から徒歩15分のところ、高台の住宅地にある。敷地は西側に幅員5mの道路が接し、東側に崖がある。市街化調整区域内、建築基準法22条指定地域に属している。

設計条件

施主は設計者と親族関係であり、30代の夫婦と子供1人の家族である。施主から設計者に要求されたことは、「今後の家族の変化におおらかに対応するフレキシビリティをもつこと」、「東側に広がる眺望を生かすこと」、「外観は凹凸のない単純な切妻屋根の形をしていること」など内観と外観に具体的な要望があった。



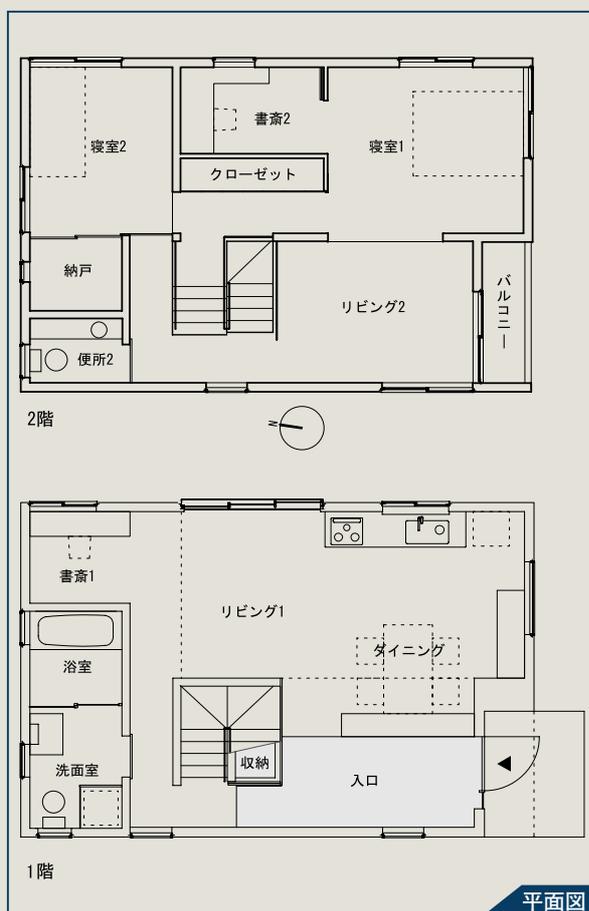
配置計画

敷地の形状から東側の眺望を生かした配置と同時に、旗竿のこの敷地では建物を道路の正面に建てると南側を建物で埋めてしまうこととなるので自然と配置が決定した。

南側に張り出さない配置により隣の家との違和感なく並ぶ。これにより風の通り抜ける場所も生まれ、視線も通る。この崖への通る視線は、周りの住民との共有の景観となっている。

外観

外観は、施主の「外観は凹凸のない単純な切妻屋根の形をしていること」という要望を叶えた形





外観

(©写真は全て細矢仁氏撮影)



1Fリビング

になっており、小さな子供が思い浮かべる絵本にでてくるような家らしい形をしている。周辺の家により小さく見せることで違和感なく並んでいるが、その中でも目を引くような住宅となっている。

家の形をしているけれども従来とは違うモダンさを出したいという施主からの要望によりガルバリウム鋼板を選んだ。屋根から外壁までを同じ材質（ガルバリウム鋼板 $t=0.35\text{mm}$ ）、同じ工法でつくることにより外観は凸凹のない統一感のとれた形となっている。

外壁面には出隅に見切り金物をつけず、平葺きが続いている外観は、ガルバリウム鋼板で家が包まれているような印象がある。



2Fリビングより寝室側をみる



2. 5F 南側よりみる

✕ 平面計画 ✕

矩形の平面形をL形と矩形の2つの領域にわけ、2階の床レベルを90cmほどずらしている。そのことで、天井が低い部分と高い部分が1、2階それぞれに生まれている。

1階のプランニングは平面的な規模と天井高を対応させている。天井が高く広い空間と天井が低く小さな空間とを、水廻りを除いたワンルームの中に配置し、リビング・ダイニングや入口・書斎など住宅の標準的な居住空間にあてている。

2階では、屋根架構がそのまま現れた天井に全体が統率されるなかで、床レベルの差によって大きく2つの領域が出来ている。建具のない額縁状の開口が設けられた壁が、それらの領域を分節しながら同時に縦横に繋げ、1階とは異なった性格のワンルーム、言い換えると見え隠れしながら空気が繋がる場所をつくっている。

✕ 内部空間 ✕

天井高の異なる領域の境界に段差の結果として生まれるスリット状の開口は、ハイサイドライトのように上部からの光を1階に通しながら2階の空間の光景を視覚的に伝える。その結果、家の中は階で区切られずに全体がゆるやかに繋がって

るように感じられる。また、ひとつの場所から、視界や意識が焦点距離を変化させながらいろいろな方向・空間に向かうことになる。

例えば、2階西側の場所から東側を向くと、室内の間仕切りと外壁の開口を貫通して、斜め方向に広がる眺望風景と斜め上の空を見る事が出来るし、1階中央にいと直接的間接的にすべての方角に開口があり、外部あるいは隣接する室内の窓景がいくつも目に入ってくる。

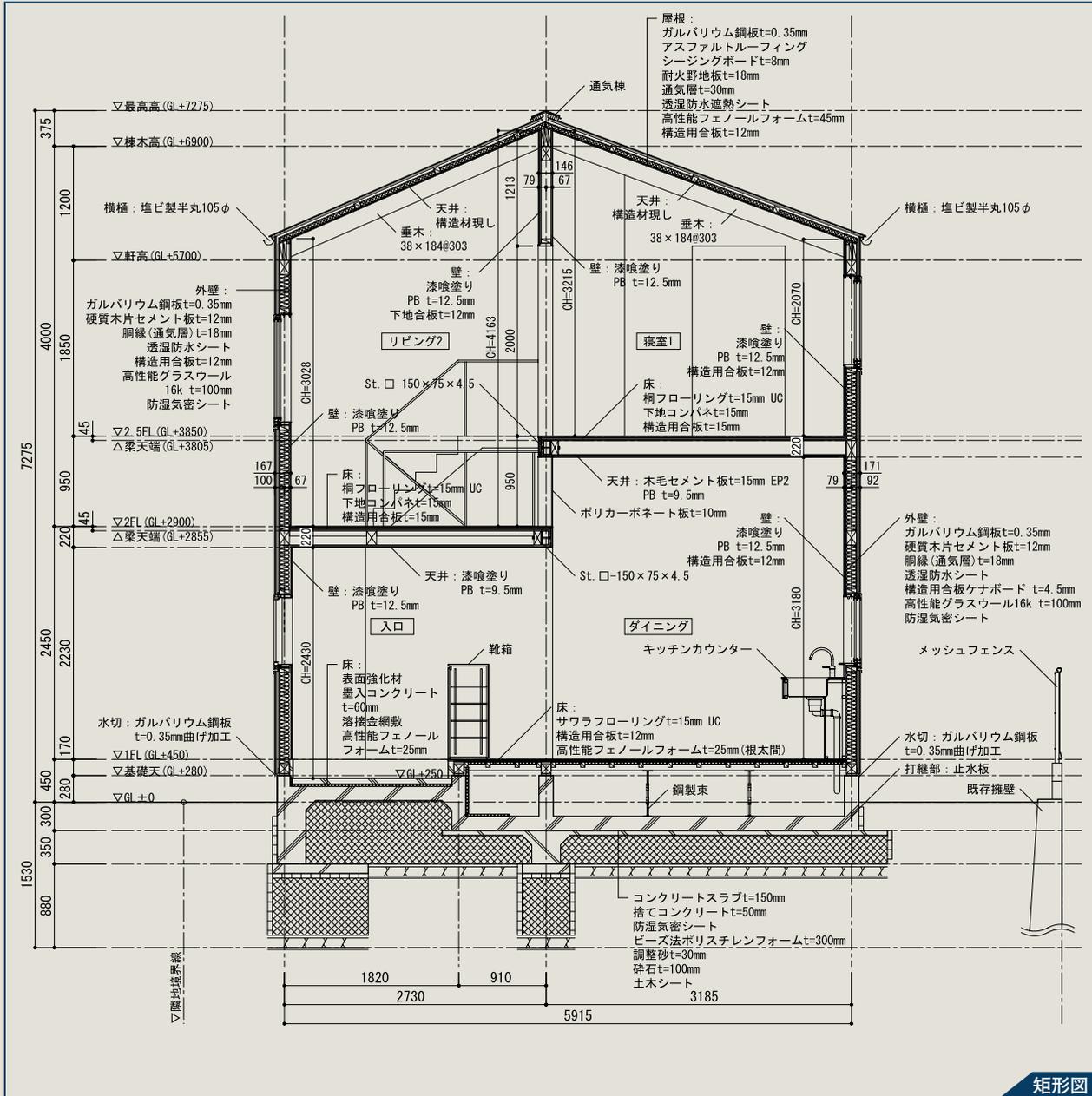
✕ 構造上の特徴 ✕

主体構造は木造であるが、スリット部一部に軽量形鋼の梁を使用している。

また、地盤は造成しているため崖側と崖でない側とでは強度が違う。そのアンバランスな地盤のため地盤置換工法（地盤を円筒形状に掘削して排土を行い、セメントミルク液（セメントと水の混合液）を掘削孔に充填した上で杭を立て込む工法）という構法を用いている。

✕ 設計者のファインスチールに対する考え方 ✕

かつてのような金属屋根に対する偏見がなく、施主の要望により、屋根と外壁にガルバリウム鋼板が用いられた。



矩形図

設計者はファインスチールの長所として、耐久性・施工性・コストパフォーマンス・意匠性に優れていることなどを上げている。また、屋根職人からカルバリウム鋼板は、他の素材にくらべ夏でも冷たく施工がし易かったともいわれた。

ただ、金属の加工全般に当てはまることだが、細かいところをみると、サイディングの場合、エッジが目立ち設計者の意図が反映されにくいこともあるとのことだった。

設計：高橋晶子+高橋寛/ワークステーション

住所：〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43-401 TEL：045-641-2491 FAX：045-641-2490 E-mail:wstn@js4.so-net.ne.jp URL:http://www.wstn-arch.com
 レポーター：東京理科大学大月研究室 井上裕介 (M1)、濱本理紗 (M2)

最後に

本物件は、間取りが決まった硬い住宅ではなく今後の家族構成によってフレキシブルに変化できる住宅となっている。

今は今の生活パターンがあり、時間によって違う生活パターンが生まれる。今回の住宅のように、その時その時の生活に対応する住宅が今後求められるのかもしれない。

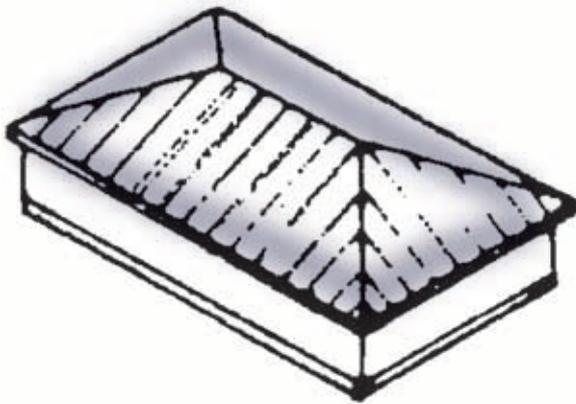
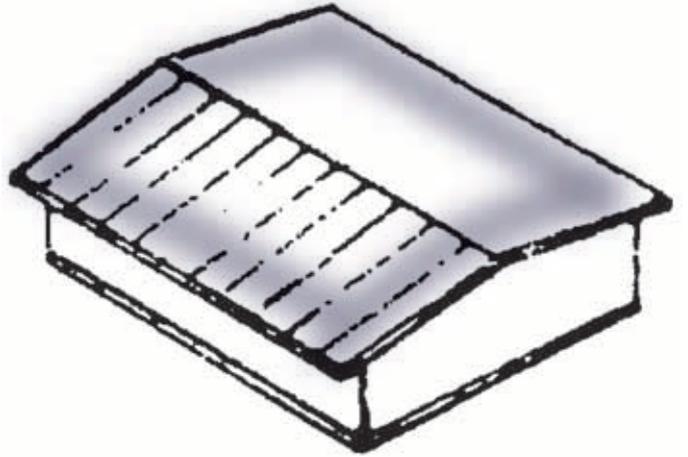
1 切妻〔きりづま〕

切妻屋根は、図のように棟を中心として両側に雨水を流すよう作られた屋根の形式をいいます。

切妻屋根は、屋根の原形とも考えられているもので、上代の切妻形住居のことを真屋（まや）とか両下（りょうか又はりょうさげ）と呼ばれていました。なお、この屋根は主に高床式の住居に用いられていたそうです。

ただし、昔は単に切妻とはいわず、切妻造りというように使っていました。今我々がいう切妻とは少し意味が違うと思います。ちなみに「妻」とは物の端を意味し、屋根を単純に大胆にスパッと切った形と通じているように思えます。

ついでですが、妻側に出入口があるものを「妻入り」といい、桁側に出入口があるものを「平入り」と呼びます。



2 寄棟〔よせむね〕

寄棟屋根も屋根形式の一種で、切妻の屋根の妻側にも雨水が流れるようにした形を指しています。上代には寄棟式住居を東屋（あずまや）と呼び、竪穴式住居の形式を引き継いだもののようです。

蛇足ながら真屋は格式が高い建築で、東屋は田舎風の建物との認識があったともいわれていますが、あまり根拠のない説との見方もあります。なお寄棟造りを四注造りともいいます。形は図の通りです。

3 吾妻屋根または東屋根〔あづまやね〕

九州、四国などの西国も寄棟は多く見られますが、江戸時代にはどういう訳か関東以北の素朴な寄棟屋根が、目についたようです。そこで寄棟屋根を（東屋根・あづまやね）と呼ぶようになりましたが、この呼び名は、昔の東国は近畿地方から見たとき、若干見降ろした様子が伺えます。

また、吾妻屋根と書いて「あづまやね」と読んでいます。さらに、四阿と書いて「あずま」と読んだりしました。この「阿」は軒を意味するそうです。

4 四つ屋根〔よつやね〕

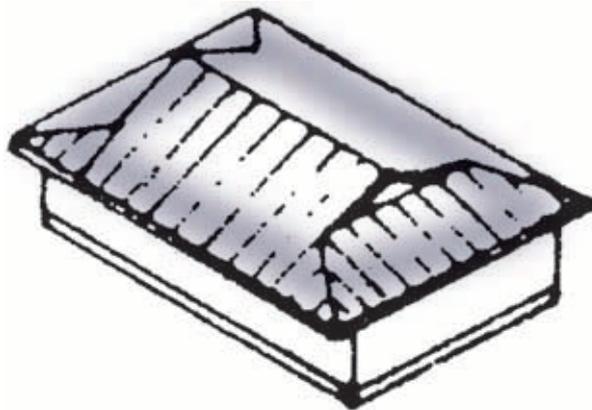
民家の寄棟屋根の方言の呼び方で、東北地方の言葉です。同地方には、その他「よつや」があります。四国地方では「四方屋根」や「四方棟」などがあり、岡山県地方では「ふきどめ」が、山梨県地方では「つぶし屋根」などの呼び方があります。

5 入母屋〔いりもや〕

この屋根の形は日本独特のものといえるもので、西洋はおろか東洋でも見ることが少ないものです。寄棟屋根の上に、切妻屋根を載せると入母屋屋根になります。図で御覧下さい。

したがって、先ず寄棟と切妻屋根が出来て、その後両者を組み合わせることで入母屋屋根が出来たと想像されています。ということは、先の両屋根よりも歴史的に新しい屋根の形式といえます。

昔、入母屋屋根は寺院や宮殿など、立派で権力の象徴的な建物に用いられたようです。今でも日本人の心の奥深くこの形が刻み込まれているのか、社寺建築の大部分は入母屋屋根となっていることは御存じの通りです。

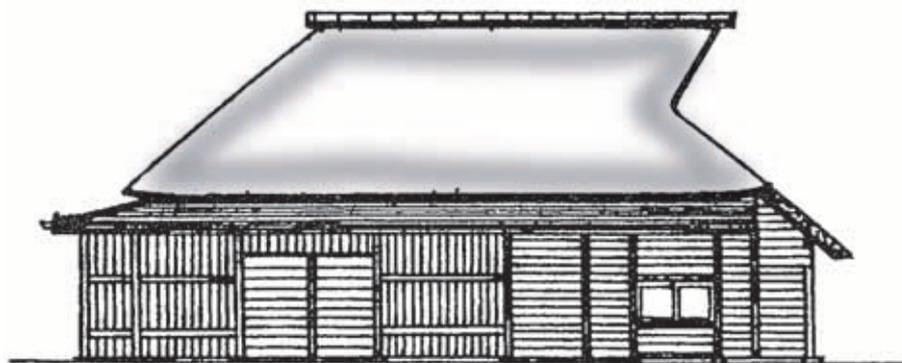


6 片母屋〔かたもや〕

屋根形式の分布上、寄棟屋根と入母屋屋根が入り混じる地方では、そのいずれとも言えない屋根が見られます。

例えば、寄棟でありながら、棟積茅の小口を入母屋風に仕上げたり、この部分に煙出しの小さい孔を開けて、入母屋屋根に近付けたりのものがあります。このような棟の小口を「小妻」(こづま)と呼びます。

このような屋根は、寄棟屋根から入母屋屋根へ発展する過程を示しているものと考えられます。これは方言で民家を指している場合に使われています。



ところで、

このような入母屋屋根は、片側の妻だけにあって、他方は寄棟という変則的な屋根があります。これを福井県地方では「片母屋」といい、東北地方では「剣先破風」、新潟県では「千鳥破風」などと呼んでいます。



281

東京大学生産技術研究所
藤森研究室
担当：松田浩子

都市の地脈・水脈② 大阪
自然と人が編み込む都市

かつては名実ともに「水の都」であった大阪。川が運んできた土砂が堆積して形成された地形と、水運を支えた河川網抜きには語れない。地形や水系に人の手が加わり、日々の生活が営まれ、まちがつけられた。水と土の自然な物質循環を改変したことで、微妙なバランス、いやアンバランスを内包している。

約6000年前の縄文海進のころ、今の河内平野は海とつながった湾であり、上町台地が半島のように突き出していたという。海面低下とともに、湾は淀川と大和川が運ぶ土砂で徐々に埋め立てられ、上町台地の波打ち際に発達した砂州が海への出口を塞ぐようになると、湾は内陸化し湖になった。

そのような変化の中、上町台地付近に古代の港「難波津」が置かれたことが都市としての始まりであろう。今の太閤川(旧淀川下流部)に当たると思われる「難波堀江」という運河が5世紀ごろ掘削されたらしく、これが人の手で最初に加えられた大規模な改変といえるかもしれない。この運河は湖の排水と航路を担っていたとされる。

大阪の地盤形成は「アジアモンスーン造山帯」の自然史そのものである。地震や暴風雨の後の生々しい土砂崩れの映像をテレビで見る機会も多いが、そのように活発に生産される土砂が川の洪水によって低地に運ばれ、前回(2008年冬号)書いた扇状地や、自然堤防帯、デルタ(三角州)、砂州といった沖積平野が形成されてきた。

大阪は、上町台地に都市の中心となる核があり、その周辺の沖積平野に都市空間が広がっていった。現在もまちの空間構成に痕跡を残している都市建設は、豊臣秀吉の城下町にさかのぼる。そして江

戸時代初期にかけて天下の台所たる「大坂三郷」が形成された。

「大坂三郷」の地形は、上町台地の北の天満砂州および西側の難波砂州と、さらに西側のデルタ(埋立地)から成るが、まちの形成はこれらの地形と連動していた。

まずは上町台地(標高約6~20m余り)に大坂城と南北軸の街区が整備された後、砂州(標高約2~6m)に天満と船場ができる。天満は大川によって台地と隔てられているが、船場がある砂州と上町台地との境界には東横堀川が開削される。遅れて掘られた西横堀川は砂州とデルタの境界に位置し、デルタ(標高約2m以下)に位置する西船場や堀江は運河と街区がセットでつくられた。

沖積平野での都市形成には、いかに排水を整備するかが重要なポイントになっている。前回の岐阜は扇状地に形成されたが、扇状地はもともと透水性が良く、勾配があるため自然排水は比較的良好である。一方、大坂では、地形ごとに異なる排水条件に合わせた工夫がなされ、排水路としても機能する運河が街区形成に影響を与えた。

上町台地からの雨水などは周辺の低地に流下するが、台地から一気に集まる雨水を受けて流すために砂州との境界に東横堀川が掘られたと思われる。

砂州でも水はけは悪くなく、船場での排水には「太閤下水」と呼ば



図1 明治中頃の大阪略図



図2 「天下の台所」大坂の心臓部だった中之島(右手)と堂島川

れるようになる敷地境界上の背割下水が担えばよかった。

しかし、デルタでは勾配が殆どなく排水は停滞しやすい。このため西船場や堀江に運河が多いのは、掘った土砂で地揚げするとともに、排水を促す水路をたくさんつくって地盤条件を整えたからである。もちろん運河が水運に利用できるという目的も重要だった。さらにデルタにおける運河の役割には運河の水が地下水位を保ち地盤沈下を防ぐ役目を負っていた。

このように「大坂三郷」では、運河が排水や保水、舟運路といった複合的な機能を担い、微妙なバランスの上に地の利を生かした都市集積が近世初期に実現した。

では洪水の時はどうだったのだろうか？いにしえより、淀川、大和川流域の洪水はあまたあり、近世には1674年や1802年の洪水など、大坂の町場が浸水することも数回はあったようだ。さすがに上町台地に洪水が及ぶことはなかったとみられる。

しかし、「大坂三郷」での浸水に比べ、周辺の農村部の水害は比較にならないほど頻繁であった。河内平野では淀川や大和川の氾濫に加え、内水の停滞による浸水被害が数多く記録に出てくる。1704年に大和川の付け替えという大規模事業も実施されたが、淀川や内水の停滞に関しては相変わらずであり、淀川河口の新田開発と時を同じくして河内平野の排水事情は

かえって悪化したという。

1885年(明治18年)の大洪水は、オランダ人技師による河川改修が始まっていたとはいえ、まだ小規模なもので、近世の空間構造を色濃く残した時期であった。淀川左岸の河内平野では広範囲に氾濫し、標高約5m以上の平野郷や旧大和川沿いの微高地が辛うじて浸水を免れている。

大阪市中では、天満の一部が浸水しなかったほか、西横堀川がほぼ浸水被害の有無を分けるラインとなり、上町台地と砂州上にある船場の大半の地区は浸水を免れた。

このほか、過去に地震による津波や台風時の高潮の被害も散見されるが、浸水被害に限ってみれば、台地や砂州上の市街地が水に浸かることはあまりなかった。西船場や堀江より海側が被害にあったり、あわなかつたりであった。

自然と都市との微妙なバランスは、実に危ういものであった。河内の湖を埋め立ててきた土砂の堆積は終わることなく、天下の台所を支えた港としての機能を常に脅かし続けてきた。近世には市中の運河の浚渫が頻繁に実施され、近代になってもオランダ人技師らが直面したのは築港と治水の障害となる河口部の堆砂であった。

一方で、このような川の土砂堆積作用は、経済活動に利用された。淀川河口部の堆砂は干拓や埋め立てにより人の手で陸化された。さ

らに河内平野では堆積土砂で大和川となっていた大和川を付け替えたことで、旧流路沿いに高燥な土地ができた。いずれも町人や富農らにより次々と新田開発された。

近代になっても開発への流れは続き、新田開発から市街地開発へと姿を変えた。

大正期まではまだ、近世と同様に運河開削と街区整備がセットになった状況が、陸上輸送の整備と平行して続いていた。境川運河や大正運河など、民間の土地会社によるものもあり、海際の新田は徐々に市街化された。1899年(明治32年)の山口半六が描いた近代都市計画(実現せず)でも、整然とした道路網整備と運河開削が同時に盛り込まれていた。

水害の多かった河内平野にも、明治末ごろより都市化の波が及ぶようになった。鉄道沿線の旧大和川沿いの高燥な土地はいち早く住宅地として注目された。低地は耕地整理により大きめの矩形街区となり、街区の中は路地と細分化された宅地で埋まった。

第2次世界大戦後、大阪の運河は戦災の瓦礫処理や防潮堤の敷設、河川改修による本川からの流入水量減少など、マイナス要因が重なり多くが埋め立てられた。今も街区構成に「水の都」や近代のモザイク状の市街化の痕跡を留める大阪。その混沌とした様相は、長い歴史の中で自然と人が編み込んできたものが表出している。



図3 大正期に大和川の旧流路沿いに開発された市街地(大阪の阪樟蔭女子大前)



図4 河内の湖の名残だった池を近世に耕地とした鴻池新田の会所



日新総合建材株式会社



セツ星サイディング「メタルキューブ」

魅せる、守る、保つ。 外装材の可能性を追求する、日新総合建材。

家の外観は、そこに住む人々の個性やライフスタイルを表す、暮らしの装いです。

しかし、単に見映えの良いものでは家を守ることはできません。意匠性はもちろんのこと、耐久性や遮音性といった様々な性能が求められます。

日新総合建材は、日新製鋼グループの確固たる建材メーカーとして、高品質な原材料と独自の鋼板加工技

術や表面処理技術などを活かし、高機能な金属外装材を生産。原板からテクスチャーの成型に至るまで一貫した製造体制で、最新ニーズに応える幅広い商品を市場やお客様へいち早くお届けしています。

意匠性と機能性、そして街や自然との調和。それが、私たちが提案する商品テーマです。日新総合建材は、確かな商品で、快適な住まいづくりを応援します。

～個性あふれる豊富なバリエーション～

石積み、塗り壁、木目などの自然調から都会的なメタリック調まで、多彩なラインナップを揃えた“セツ星サイディング”をはじめ、外断熱システムにも活用できる山高50mmの折板外装材「スパンダ」、風格のある瓦調の金属屋根材「月星タイトルーフH1」など、バラエティ豊かな商品をご用意しています。外壁材から屋根材、様々な用途に使用できる下見材などまで、色、柄、デザイン、そして優れた性能を持つ商品を展開。一般住宅やオフィスビル、店舗、研究所、倉庫、学校など、さまざまな建物に採用されています。



金属屋根材「月星タイトルーフH1」



金属外装材「スパンダ」



セツ星サイディング「くしびき」



セツ星サイディング「ブリック NEO」



セツ星サイディング「サガン」

耐食性に優れたファインスチールが建物を守る

“セツ星サイディング”の表面材には、主に優れた耐食性を持つファインスチールが採用されています。また、屋根材や装飾役物、下見材の原板としても幅広く使用。錆に強く、軽量で加工性にも優れたファインスチールは、徹底した品質管理と高度な製造・加工技術により、当社のさまざまな外装材として活躍しています。

日新総合建材株式会社
塗装建材営業部 塗装建材チーム
〒135-0016 東京都江東区東陽3丁目
23番22号（東陽ANビル）
TEL. (03)5635-6130 FAX. (03)5635-6139
www.nisshin-aandc.co.jp

ファインスチール教授、
屋根について考える。

屋根を考える人は、
いのちを考える人。
安全・安心の金属の屋根、
ファインスチール。



本誌の“誌面充実”にあたり、下記ホームページで
インターネットによるアンケートを実施しています